

研究課題名	胸腔鏡手術後の開胸後慢性疼痛の調査
当院の研究責任者	渡邊健一
本研究の目的	<p>手術後2か月以上痛みが継続する場合、開胸後慢性疼痛Chronic post-thoracotomy pain (CPP) と診断されます。開胸手術後のデータであるが30%に発生し、5%は重篤な症状を来すと報告されています。胸腔鏡下手術が普及していますがポート孔からの操作でも肋間神経の障害は発生し開胸手術と変わらないという報告もあり、気胸に対しては、胸腔鏡下で胸膜切除術を施行した60例の調査で31.7%にCPPが発生したとする報告もあります。気胸に対する胸腔鏡下手術が普及しているが開胸手術と比べ再発が多く、再発予防のため本邦では臓側胸膜に補強材を貼付する方法が行われています。補強材にはポリグルコール酸シート (PGA) と血液製剤であるタコシールがあります。ネオパールは気胸術後再発予防のため炎症を誘起させるため添付文章には副作用として痛みがあることが書かれております。当院では酸化再生セルロースシート (ORC) を胸腔鏡手術普及当初から使用していますが添付文書には術野の止血が完了したらできるだけ取り除くようにとされており、締め付けるような痛みや神経痛出現がある可能性が記載されています。ORCは強い酸化作用にて臓側胸膜の肥厚をもたらすとされており胸水のpHは5-6まで低下します。剤形によってはpH2.8まで下がりその組織障害性なども報告されているため術後疼痛を増強させるかもしれません。そこでORC使用するとCPPが発生しやすいのではないかという仮説を立てました。</p>
調査するデータ	2021年7月から2022年4月まで施行した150例の胸腔鏡手術について、ORC使用した場合としない場合で術後疼痛や開胸後慢性疼痛の出現について調査します。
研究の方法 (調査する情報)	観察項目 年齢、疾患 ORC使用の枚数、PGAシートの使用の有無 ポート孔の数、術後点滴での鎮痛剤の投与回数、3日目までの痛みスケール値、内服薬、ジクロフェナクやロキソニンといった非ステロイド性鎮痛薬、アセトアミノフェン、トラマール、プレガバリンの処方量 (処方期間)、術後2か月以上たった時の創痛に関する患者さんの自覚症状の訴えについて電子カルテ上で後ろ向きに調査します。
他の研究機関への情報の提供	他の機関への情報の提供はありません。
個人情報の取り扱い	患者さんを特定できる情報 (手術日など) はすべて削除します。また研究成果は学会などで発表を予定しておりますが、個人を特定できる情報は利用いたしません。
本研究の資金源	本研究に関連した開示すべき利益相反関係にある企業団体はありません。
お問い合わせ先	電話：03-3700-1151 担当者 渡邊健一 (呼吸器外科)